

「授業研究」の総括と展望

大学教育センター 竹盛 浩二

1. 授業研究の目的とこれまでの経緯

大学教育センターにおいて、「授業研究」の企画と実施を筆者は担当している。平成26年度より開始した「授業研究」をいまいちど振り返り、その課題と展望を示しておきたい。

「大学教育論叢」創刊号（2015. 3）で、大学教育センター長の太塚豊教授が述べた「授業研究」の趣旨を要約すれば、以下のようになる。

大学教育センターでは、授業改革の一環として授業の可視化を目標のひとつに掲げ、そのための手段として平成26年度より「授業研究」を実施することになる。「授業研究」は、わが国では明治以来の教育実践の中で、教員の指導力を向上させる手法として育まれた。日本の初等・中等教育の質の高さの秘訣として、“Lesson Study”の呼び名で、むしろ海外で注目を集め、改めて脚光を浴び、積極的に取り入れられるようになり、その手法は今や世界各地に広がり、授業のレベルアップのための教員間連携も進んでいる。

「授業研究」では、教師が自らの授業を公開し、授業後に検討会で話し合い、教員同士が学び合う。この手法は、高等教育の大衆化状況の下で、大学にとっても決して無縁のものではない。本学の授業改善にとっても有効に機能するとの見通しをもって、まず大学教育センターにおいてこれを開始する。さらにその授業実践記録を蓄積し、同センターの「大学教育論叢」で開示するとともに、共通教育のみならず広く全学の授業改善に向けての参考に供することを目指す。

このようにして始まった「授業研究」は、今年度で6年を迎える。年度ごとに実施日時と授業科目、授業担当者を整理すると下表のようになる。毎年3～5回の授業、6年間で延べ20名の教員の授業が公開され、延べ120名以上の教員が授業を観察し、検討会に臨んだことになる。

日時	授業科目	科目分類	授業担当者
平成26（2014）年度			
7月4日（金）	キャリアデザインⅡ	共通教育科目	前田吉広助教
10月24日（金）	英語発展Ⅱ	共通教育科目	米崎里准教授
12月8日（月）	文化リテラシー入門	人間文化学科専門科目	竹盛浩二講師
平成27（2015）年度			
7月9日（木）	TOEIC(I)	共通教育科目	Warren Tang助教
11月4日（水）	日本語表現法2	人間文化学科専門科目	竹盛浩二講師
11月27日（金）	キャリアデザインⅡ	共通教育科目	津田将行講師
12月11日（金）	教育制度論	教職科目	太塚豊教授
平成28（2016）年度			
5月19日（木）	英語（I）	共通教育科目	Jason Lowes講師
6月27日（月）	中国語（I）	共通教育科目	劉国彬准教授
10月25日（火）	英語（II）	共通教育科目	中尾佳行教授
平成29（2017）年度			
6月15日（木）	物理の世界	共通教育科目	地主弘幸准教授
7月10日（月）	英米の文学と思想1	人間文化学科専門科目	若松正晃講師

12月19日（火）	基礎数学	共通教育科目	小野太幹准教授
平成30（2018）年度			
11月21日（水）	人文地理（2）	人間文化学科専門科目	小原友行教授
11月29日（木）	ヨーロッパの歴史と文化2	人間文化学科専門科目	村上亮講師
12月8日（火）	教職実践演習	教職科目	竹盛浩二准教授
令和元（2019）年度			
7月11日（木）	特別活動の指導法	教職科目	大塚豊教授
11月27日（水）	教職概論 道徳教育の研究	教職科目 教職科目	牧貴愛非常勤講師
12月3日（火）	ヨーロッパの歴史と文化2	人間文化学科専門科目	村上亮講師
1月15日（水）	暮らしとバイオ	共通教育科目	鶴崎健一教授

大学教育センターの「大学教育論叢」では、創刊号から本誌第6号まで、これらの授業について、「センター活動報告」中、「大学教育センター「授業研究」(FD研修)の記録」として、授業者によって授業の概要が記述され、検討会での真剣な議論が記録として残されている。

さて、このようにして継続・蓄積してきた大学教育センターの「授業研究」の特色と課題についてここで整理・確認するとともに、今後の展望についても、いくらかでもその道筋を提示してみたいところである。

2. 特色と課題

一覧表を見てわかるように、「授業研究」の俎上に載せた授業科目は多岐に渡っている。それはこの取り組みを開始した大学教育センターの教員スタッフの担当専門領域によるところが大きい。基本的には共通教育科目であり、兼任スタッフであるところから人間文化学科専門科目があり、くわえて教職科目があるが、それらの授業内容は様々である。異なる領域の授業を相互に批評し合うには一定の見識が必要であるのは言うまでもないが、科目間を通底する共通項を巡っての相互批評を通して、教授方法について改善・検討を加えるとともに、自ずとその教授内容の吟味と精選に向かうこととなる。

授業形態については、グループ討議や発表、PPTを使用しての学生によるプレゼン発表など、いわゆるアクティブラーニングといえる形式もあれば、講義形式や演習形式もある。また、ICTの利活用が進んでいる。PPTだけではなく、DVDを含む映像が利用されている。学生の意欲を喚起し、主体的な授業参加のための方策が検討されている。電子黒板はまだ登場していないが、アプリの利用によって、スクリーン上でリアルタイムでの効果的な電子板書が実現している授業もある。視覚にも訴えた理解と定着を図る試みが進んでいる。学内オンライン学修システム Cerezo の機能を使った教材資料提供、あるいは予習復習の管理も行われている。授業担当者による個人差はあるものの、全般的にはICTの利活用が行き渡っている。単なる講義形式で展開される授業は、もうどこにもない。この点も含め、授業技術はこの相互検証の中で向上する。

授業の目標は、すでにシラバスにおいて示されている。「授業研究」に供される授業は、シラバスで示した授業計画の中に位置付いている。検討会の冒頭で授業者は皆、そのことを確認する。その上で、その授業の個別条件を補足し、学生の学修状況を説明する。目標に沿った授業のねらいがあり、授業方法があるのである。

同時に、授業者は、学修者の全体的、あるいは個別的状況の把握について、あるいはそれへの配慮について、言及することとなる。これは、授業が決して一方的な営みではないということなのである。このことは、検討会における討議のもう一つの大きな柱となる。「授業研究」が進むにつれて、その問題の方に議論の軸が移っていったと言えるかもしれない。授業内容とその学問的背景に目を向けなが

ら、授業方法にもお互いに関心を示しつつ、もう一つには、把握する学修者実態に関する情報共有の機能を、「授業研究」の検討会は果たしている。学問研究の上において、授業者の論理と学修者の論理が交差するところに授業は作られるのだということの、帰結でもある。

授業を観察する者には授業評価シート（*資料1）が配られる。項目ごとに記入し、検討会後に授業者に手渡される。これを集計し、管理することはない。このシートは、あくまで授業観察のための評価指標である。すなわちそれは、観察者（評価者）の授業自体に向けられる評価の眼差しなのである。シートの最後に「本講義が評価者自身の講義の反省にとって有効であった点があれば記入してください。」とある。結局は、他者評価を通じた自己評価向上のための研修だということなのである。「授業研究」をFD研修の一環として行っているゆえんでもある。

3. 展望

じつは、「授業研究」のために快く授業が提供されたことはほとんどない。筆者は何度も願いを積み重ね、今日までの6年を経た。

すべてがうまく機能する授業というのは希でもあって、安易に見せるものではないという偏狭な考えが根強いからであろうか。あるいは、他人の授業を見るまでもなく、自分の授業は自身で検証し向上させていくのだという、秘技とも言える営みの、その自信が強固にあるからであろうか。

たしかに、授業の教室は、教師と学生を繋ぐ、ブラックホールのような密度の高い重力空間である。このブラックホールから出ることはできず、外からも正確に捉えることはできない。そう言って、壁を築く。

「チーム」という概念がある。高貴で孤高な意思ではなくて、チーム内で相互に検証し合う、開かれた協働の教育体制づくりが必要であるということである。「授業研究」は、そのための有効なひとつの方法である。

これまで、大学教育センターの枠を越えて、授業科目によっては高大接続の観点から地域の高等学校に呼びかけ、2名の先生の参加が実現した（平成28、29年度）こともある。あるいは、アメリカからの研修留学生2名の参加もあった。また今年度は、いろいろな制約がある中で非常勤講師の先生に授業を提供してもらい、その後の検討会も実現した。兼任ということもあって、大学教育センターを越えて人間文化学科の専門授業の提供もある。

今後、「授業研究」は大学教育センターにとどまらず、広く全学的なFD研修のひとつに発展していくことが期待される。何故。それは、繰り返すまでもない。

多忙な毎日、「授業研究」の時間に自分の授業が重なっていて参加できないということはある。結果、授業への参加者がいつも多いわけではない。そういう場合には、録画した授業ビデオを後で視聴し、検討会に参加するということもできた。これは、「授業研究」を発展させる際のひとつのヒントにもなる。

「授業研究」のために、2年連続で授業を提供する。初年度の検討会での議論を踏まえ、評価シートを読み返し、翌年の授業で繰り出す学問内容を精選し直すとともに、授業の構成と方法を組み替える。研究を深めながら、難解な内容を易しい言葉でどのように語り出すのかの追究である。これなどは、「授業研究」の理想形である。

「授業研究」は、授業を見る者にとっても、見られる者にとっても、「鏡」となる。「鏡は己惚（うぬぼれ）の醸造器であるごとく、同時に自慢の消毒器である。」というのは、夏目漱石の「吾輩は猫である」の一節である。その「鏡」を前にして、授業の真摯な追究は始まるのである。

大学教育センター内では6年間で一回りしたという感がある。これを今後どのように維持し、発展させていくのか、協働の検討が必要になる。

(*資料1)

授業研究ルーブリック (評価指標)

日時： 年 月 日() 時限

講義名： /受講者数：約 名

講義者氏名： 記入者氏名：

本日の授業について、下記の項目4、3、2、1の該当するものを○で囲んでください。但し、1ないし2に○をつけた場合については、改善提案を括弧内に示して下さい。

観 点	評 定
【教材研究】 教材研究の深さ、斬新さ	4 教材研究が深く、独創性がある。
	3 よく教材研究されている。
	2 教材研究が浅い。 提案 ()
	1 教材研究ができていない。 提案 ()
【導入】 授業開始時の導入方法	4 学生が授業の始まりと同時に授業にひきこまれている。
	3 授業の始まりがよく考えられている。
	2 授業の始まりに緊張感がない。 提案 ()
	1 チャイムと同時に授業が始まらない。 提案 ()
【展開】 心地よい授業のリズムテンポ	4 授業のテンポがきわめて良い。
	3 若干テンポが悪いところもあったがほぼ円滑に進んだ。
	2 テンポよく進まない場面が多かった。 提案 ()
	1 全体的にテンポが悪い。 提案 ()
【展開】 発問・指示の明確さ・適切さ (全員の参加を保障する授業)	4 発問・指示が明確であり、学生全員授業に参加できていた。
	3 若干のぶれはあったが、発問・指示が明確である。
	2 発問・指示が不明確であり、授業に参加できていない学生が数名みられた。 提案 ()
	1 発問・指示がわかりにくく、全員参加の授業にはほど遠い。 提案 ()
【展開】 学生への対応・応答	4 学生の意見・解答についての対応が見事である。また、集団の中での個別指導などが見事である。
	3 やや不十分などところもあったが、対応や応答ができていた。
	2 対応や応答が不十分であった。 提案 ()
	1 対応・応答ができなかった。 提案 ()
【展開】 板書・資料提示・ICT器機の有効活用	4 板書・資料提示が計画されたものであり、見事である。また、ICT器機が有効に活用され、視覚的な情報でわかりやすい。
	3 板書・資料提示の中に修正すべき点は見られるが、良くできている。
	2 板書・資料提示が計画されているとはいえ、わかりにくいところがあった。 提案 ()
	1 板書・資料提示が全体的にわかりにくい。 提案 ()

(シート表)

【構成】 授業の組み立て	4	導入からまとめまでが円滑で、優れた組み立てである。
	3	改善すべき点は若干あるが、よい組み立てである。
	2	改善すべき点が数点あり、よい組み立てとはいえない。 提案（ ）
	1	組み立てが悪い。 提案（ ）
【意欲・態度】 学生の学習意欲	4	私語もなく学生が集中して学習に取り組んでいる。
	3	学生の集中力が欠ける場面も見られたが、ほぼ意欲的な学習態度である。
	2	意欲的に取り組めていない学生が数名いた。 提案（ ）
	1	学生が学習に集中できていない。 提案（ ）
【理解】 学習者の理解度	4	指導事項がよく理解できているといえる。
	3	理解できていない学生もみられたが、全体的にはよく理解できている。
	2	指導内容が理解できていないところがややあった。 提案（ ）
	1	指導内容がほとんど理解できていない。 提案（ ）
【総合評価】	4	大変充実した良い授業である。
	3	改善すべき点は若干あるが、良い授業といえる。
	2	良い授業とはいえない。 提案（ ）
	1	良い授業にはほど遠い。 提案（ ）
【気づき・感想があれば記入してください。】		
【本講義が評価者自身の講義の反省にとって有効であった点があれば記入してください。】		

